

第1回極東国際経済会議

ERINA総務課長 新井洋史

ロシアでは、これまでに「サンクトペテルブルク経済フォーラム」、「バイカル経済フォーラム(イルクーツク)」といった会議が、定期的に開催されてきた。いずれも、ロシアの世界経済への統合という国家課題と地域の経済発展という2つの課題を総合的に検討し、連邦の政策に反映させようというねらいをもって開催されているものである。同様の会議を極東地域においても開催しようとの意図から開催されたのが、「第1回極東国際経済会議」である。会議開催にイニシアティブを発揮したのは、イシャーエフ・ハバロフスク地方知事であった。プリコフスキー大統領全権代表、ロシア連邦議会のミロノフ上院議長の協力を得て、2005年9月27日、28日の2日間、ハバロフスクでの開催が実現した。

ハバロフスク地方としては、この会議の成功に地域の総力をあげて取り組んだという印象である。地元新聞「太平洋の星」は2日目の会議終了にあわせて特集号を発行し、会場の出口で参加者に無料配布した。全体会議の壇上で約20社の会議スポンサーにミロノフ議長から感謝状が授与されていたが、聞くところによれば、一口5万ドルずつの寄附をしたとのことである。

確かに、かなり費用がかかっているようであった。街中の至る所に会議のポスターや横断幕が掲示されるなど、雰囲気盛り上げていた。我々日本人参加者の宿舎に割り当てられたホテルも、これまでは日本人が利用することのない無名のホテルであったが、今回の会議にあわせて改装がなされたようで、レストラン等の内装はきれいに仕上げられていた。極東最大のアイスホッケー場のアリーナを会場としたレセプションなど、極力「盛大さ」を演出していた。

ちなみに、インターネット上に会議の特設サイトが公開

されている。(ロシア語：<http://www.dvcongress.ru/>、英語：http://www.dvcongress.ru/e_Index.htm)メインとなるロシア語サイトには、基本的にすべての発言原稿が掲載されている。(英語版での掲載は遅れる模様。)

会議の参加者構成

主催者の言葉によれば、16カ国から計1,000人以上が参加とのことであり、会議は大盛況であった。最後は、ホテルなどのキャパシティの問題で、参加申し込みがあっても断らざるを得なかったらしい。実際に、直前に申し込んだ日本人で参加できなかった人がいたと聞いた。

会議の議長を務めたミロノフ上院議長をはじめ、同副議長など、連邦議会上院からの参加が目立った。他方、中央政府からは大臣以上の参加はなく、各省とも次官以下であった。極東の知事(大統領)はほとんどが出席したが、ダリキン沿海地方知事(前週末にサッカーで怪我)とアブラモビッチ・チュコト自治管区知事は欠席であった。

日本からは逢沢外務副大臣他約50人(現地参加者含む)が参加し、国別では最多の参加者数であった。初日の全体会議での外国人の発言は各国1人ずつであったが、日本からは逢沢外務副大臣と口東貿の高垣会長の2名が発言できた。両者とも、日口の経済関係が急速に拡大しつつあることを指摘し、エネルギープロジェクトなどの大規模プロジェクトの推進と中小ビジネスの振興との両方を積極的に進めるべきとの発言をした。

参加予定者名簿によれば、中国からは日本に次ぐ数の参加者があったと見られる。ロシア側は中国を重視する姿勢を見せていた。初日全体会議では、外国人として唯一、午前中のセッションで発言の機会を得ていた。また、ロシア側発言者の発言内容においても、国際経済や国際関係に関する部分では、ほぼ必ずといっていいほど、まず中国に触れ、その後日本、韓国といった順番であった。

会議の評価

2日間の会議のうち、9月27日は全体会議、28日は朝から10のテーマごとの円卓会議に別れ、夕方から再び全体会議を行った。残念ながら、1日目の会議での発言には、特段新しい内容は無かったといわざるを得ない。発言内容の多くは、発言者の所属組織の取組などの紹介と、現状の課題、解決策の提案などであり、基本的には様々なところでこれまでも指摘されている内容であった。1日目の会議後のレセプションの場で、沿海地方のゴルチャコフ知事と話をした際にも、「ここまでの内容は、議論の中身が薄い」とやや否定的な感想を述べていた。

会議の主目的が、モスクワの政府、議会に対して極東からの要望を打ち出すことにあったことから、2日目の分野ごとの円卓会議では、それぞれが提言の素案をとりまとめた。筆者は「国境協力」に関する円卓会議で、ERINAの吉田理事長と共同で準備した「北東アジアにおけるエネルギー協力」についての発表を行ったが、この円卓会議の議論の中心は中口国境における協力や経済活動などであった。円卓会議の結果として取りまとめた提言の内容は、法制などの一層の充実や国境通過地点における各種施設の整備の必要性などであった。

各円卓会議が取りまとめた提言案の内容は、最後の全体会議で報告されたが、他の円卓会議の報告を聞いても、同様に「連邦政府(あるいは連邦議会等)に対して、に関する早期取組を求める」といった内容が多かった。提言というより、「要望書」に近い内容であるとも感じた。なお、これらの提言案の取り扱いは、各円卓会議の共同議長と事務局による最終調整に委ねられることとして、会議参加者の了承を得る手続きがなされた。

他の参加者の声も聞いてみたが、日本側参加者の声としては、「特に新しい情報は無かったが、日本として存在感を示すことができた」といったものが多かった。ハバロフスクの関係者の声は、総じて会議の成功を喜ぶものであった。

一言で言えば、この会議は巨大な「お祭り」であったと言えるのではないかと。日本における「期成同盟会総会」あるいは「地域振興協議会総決起集会」といった会議のイメージに近い。その意味で、外国からの参加者に期待されていたのは、具体的な議論を深めることよりも「箔付け」の役割ではないかとも邪推したくなる。

ただし、こうした会議の機能は一概に否定されるべきものではないと考える。物理的にも遠いモスクワと極東との関係が、ここ数年のロシア経済活性化に伴うモスクワとの経済格差の拡大プロセスの中で、一層「遠い」ものとなっている。筆者は、極東の実情を知らない「モスクワっ子」らが極東の将来に関わる決定を行うケースが増えているように感じ、危機感を持っている。今回の会議のような場面を多く持つことにより、ロシアの政策が極東の実情に合致したものとなっていくことを期待したい。極東国際経済会議は隔年開催していくとの話があるが、国策として「極東重視」を打ち出している日本としても、協力していくことが必要ではないか。

